



B児から、「ありがとう。」と言われ、嬉しそうに笑うA児



ベルトの調節までしてあげると、「できた。」と、A児。ニコニコして応えるB児



ついてこないB児に気付き、持ってきたヘルメットをかぶせてあげるA児



『ヘルメットのベルトの調節がうまくいかない』B児



A児に迫り着こうと、慌てて乗るB児(写真奥)

CASE 18 2歳児

「ありがとう。」って言われたら

協力園
幼保連携型認定こども園
泉光こども園

(幼児の実態)
1歳児クラス時には、室内とつながる屋根付きテラスで、思う存分、三輪車をこいで遊んでいた子どもたち。2歳に進級すると、外で乗って遊べるランニングバイクが大好きになりました。子どもたちは、『ヘルメットをかぶって乗る』というルールを守りながら、雨の日以外は、毎日ランニングバイクに乗って遊んでいます。11月下旬、保育者が「今日も、お天気がいいね。お外に行って遊ぼう。」と話すと、子どもたちは、それぞれ自分の好きな遊びの準備を始めました。保育者はその様子を見守っています。

A児は、誰よりも早くヘルメットを取り、歩きながらベルトをキュッと締めると、お目当てのランニングバイクまで走って行きました。そして、ランニングバイクにまたがると、広い芝生の園庭へ、スピードを出しながら走らせていきます。

B児は、お気に入りの星柄ヘルメットで、A児について行こうとしましたが、きちんとベルトを締めていないために、ヘルメットが落ちそうでした。それでも、B児は、A児に迫り着こうと、何度もランニングバイクを走らせようとします。その度に、ヘルメットをかぶり直しましたが、ランニングバイクを一旦止めて、ベルトの調整をし始めました。

一方、A児は、園庭の端から端まで大きな円を描くように、勢いよくランニングバイクを走らせています。2周回すると、B児が来ないことに気付く、B児のいる所に戻ってきましたが、B児は無言でベルトの調節をしています。A児は、そのままランニングバイクで、園庭に出ますが、いつもと違うB児の表情や行動が気になっていたので、A児は、ゆっくりとランニングバイクを走らせています。その後、A児は、保育室前のテラスへ向かい、動物柄のヘルメットを持って、再び、B児の所にやって来ました。ベルトの調節で困っているB児に気づき、ヘルメットを取りに行っていたようです。

A児は、ランニングバイクから降り、B児に近寄って行くと、黙って、自分の持ってきた動物柄のヘルメットをかぶせてあげました。さらに、ベルトを調節し終えると「できた！」と、一言。『これで大丈夫。一緒に遊べるよ。』と、自分の思いを伝えているようにも、いつものように遊べない姿から、その理由を考え、B児のために行動できた満足感の一言のようにも受け取れます。

B児は、ニコニコしながら、『ありがとう』の気持ちを表現し、A児もまた、笑顔で応えているように見えました。

その様子を見ていた保育者が、「Bちゃん、してもらって嬉しかったね。Bちゃんにびったり。」と、B児の気持ちとA児の思いを言葉にし、更に「ありがとうって言うよ、A君は、Bちゃんの気持ちが分かって、もっと嬉しくなると思うよ。ね、A君。」と、言葉で2人の気持ちの橋渡しをします。B児は、照れくさそうに「ありがとう！」と、言いました。そして、A児も、満面の笑みで、B児の言葉を受け止めます。

2人は、見つめ合ったり、微笑んだりなど、言葉を使わなくても心を通じ合う友達関係だったようですが、「ありがとう。」の言葉でより気持ち伝えたのでしよう。再び、顔を見合わせて笑いました。保育者も、2人の様子を微笑みながら見守っています。

言葉は、身近な人との関わりを通して次第に獲得されるものです。この2人のように、言葉以外の表現方法で気持ちが伝わる関係でも、自分の思いを言葉で伝えると、より相手に伝わり、通じ合えることを実感させていく保育者の関わりが必要だと考えます。

保育者は、子どもが気持ちを分かり合える嬉しさを実感し、互いに笑顔になる瞬間に立ち会うことができます。子どもたちが、幼児期にふさわしい生活をしていく中で、沢山の感情体験をしながら、互いの心のつながりを感じられるようにしていくことが大切だと思います。

幼児期の終わりまでに育ってほしい姿

「10の姿」

- 自立心
- 健康な心と体
- 言葉による伝え合い
- 社会生活との関わり

先生や友達と心を通わせる中で、絵本や物語などに親しみながら豊かな言葉や表現を身に付け、経験したことや考えたことなどを言葉で伝えたり、相手の話を注意して聞いたりし、言葉による伝え合いを楽しむようになる。

事例から見られる10の育ち

言葉による伝え合い

A児は、B児の表情などから、困りを察知し、友達の為に行動した。「できた。」の言葉は、『一緒に遊ぼう』というB児への思いや、友達の為に行動できた満足感を表現したと思われる。また、B児が言葉で気持ちを伝えたことで、今まで以上に気持ちを通い合わせる体験をした。

このような体験は、言葉で気持ちが通じ合う喜びや、相手の気持ちや行動を理解したいなどの必要性を感じる経験となり、5歳児になると、言葉で伝え合う喜びを味わうようになっていくと考ええる。

事例から見られる10の育ち

自立心

毎日、B児と楽しくランニングバイクを走らせていたA児は、友達と関わる心地よさを感じていた。いつもと違うB児の行動や表情から困りを察知し、自分たちの遊びを楽しくするため、B児の困りを解消しようと考え、行動に移した。自分のしたことを認められ、満足感を味わえたと思われる。

子どもは、主体的に遊びを楽しみながら、支えられたり、認められたりして、満足感を味わう体験をする。このような体験を繰り返しながら、自分の力で行うために考え、諦めずにやり遂げることで達成感を味わい、自信をもって行動するようになっていくと考ええる。

保育者の援助・環境構成のポイント

- 自分で遊びを見つけ、じっくりと遊び込める環境
子どもの好きそうな色や柄のヘルメットや、ランニングバイク、自分で取り出せるバイクスタンドなど、自分で選べる道具の準備。何度も楽しくバイクで走りたくなるような園庭のドーナツ状の道。
- 遊びたい気持ちを持続できる環境
テラスで靴を履き、ヘルメットを取り、ランニングバイクに乗って園庭に行けるような、子どもの動線を考えた道具の配置。
- 共に過ごす心地よさを感じる環境
子どもの思いを言葉にして、子ども同士の心のつながりを仲立ちする保育者や、一緒にいて心地よさを感じる友達。